

「法華經の中国的展開」

村 松 法 文

インドで興った佛教は各地に伝播され、異民族と異質の文化をもった土地で、様々の変遷を経ながら各々独自の佛教思想を生み出してきた。中でも、特に多面的で実り多い思想を形成したのは中国に於てであろう。佛教の伝来時には既に固有の文化を有していた中国ではその受容に当り、いわゆる老荘思想などの中国固有の思想との接触を持ちつつ、又前後関係不明のまま将来された経論を吟味して位置づけていく教相判釈の態をとって次第に中国固有の佛教を形成していった。そして、涅槃宗、三論宗、天台宗、法相宗、華嚴宗、更には禪、浄土などの中国佛教を代表する教学を展開していくが、それらに共通して研究された経典の随一が法華經であった。いわば佛教が中国に於て結実した根源は法華經にあるといっても過言ではなからう。

本書は、法華經に関する総合研究として、立正大学法華文化研究所に於て、昭和三十六年来、各分野からの法華經解明がな

されている中の一部である。同研究所ではこれまでに、1「法華經の思想と文化」2「近代日本の法華佛教」3「法華經の成立と展開」の三部を出版しており、本書はその第四巻として刊行されたものである。今回の研究目的は「中国に於ける法華經の註釈書を総合的に討究し、その思想的変遷を明らかにすることによって、法華思想と中国文化との連関を把握し、ひいては法華思想と日本文化との連関研究の基礎資料を得ることを目的とする。」と、あとがきの中で述べている。今はこの研究目的を念頭におきつつ、本書に於てその目的が果されているかを検討してみたい。

二

本書は、第一篇「中国における法華經研究の特性」、第二篇「中国における法華經註釈書の研究」、第三篇「漢訳文献による法華經及びインド撰述註釈書の研究」、第四篇「チベット訳法華經文献の研究」の四篇より成り、それぞれ専門の学者による二十五篇の論文を収めている。各分野の代表者を網羅している点においてその顔触れの揃っていることに驚かされる。今は一々の論文の詳細な評はさげ、各篇ごとに全体的に概観してみたい。

第一篇の「中国における法華經研究の特性」では次の四篇の論文を収めている。

1 中国に於ける法華經研究史の研究 (坂本幸男)

2 法華經を中心とした印度佛教の中国的受容 (宮本正尊)

3 長安止住時の羅什とその周辺（野村耀昌）

4 法華経解釈の解剖（石津照璽）

この第一篇では、法華経が中国に於て研究された特性を明らかにしようとして意図されているが、内容論文はそれぞれ、中国釈家の註疏に見られる佛身觀の概略と、智度論の性格解釈、長安止住時の羅什の周辺―特に律藏を奉ずる者の動静と後秦の政情、更に、天台の法華経実相論についての研究である。今これを見ると、卒直に言って本篇がねらいとしたところの、法華経を中国的特性に於て研究しようとする意図とかなりずれていることを感ぜしめられる。何故にもっと篇目に沿った研究が進められなかったかと些か惜しまれる。中には論題と内容の主題が異なるものや、十分標題の意を究明していないものも見られる。もともと本篇に於ては、法華経と中国思想との交渉の論文が予定されていないながら、現実にはそれが入っていない。中国思想との關係を検討しなくて、法華経の中国での研究のとらえ方の特色を如何にして明らかにすることができようであろうか。

第二篇の「中国における法華経註釋書の研究」は本書の中心研究として、中国に於ける代表的な法華経研究者九人の説を、それぞれの著述について検討している。所収論文は次の十篇である。

- 1 竺道生の法華思想（横超慧日）
- 2 法雲の法華義記の研究（田村芳明）
- 3 智顛の法華玄義・法華文句の研究（佐藤哲英）
- 4 吉藏の法華経玄論について（里見泰穂）

5 吉藏の法華義疏の研究（丸山孝雄）

6 道宣の法華経観（平川彰）

7 窺基の法華玄賛における法華経解釈（勝呂信勝）

8 法華五百問論の研究（日比宣正）

9 戒環の法華経要解の研究（水野弘元）

10 智旭の法華経会義等の研究（浅井円道）

この第二篇は法華経の註釋書の研究を通して、各家の思想の特色と、全体の思想変遷を明らかにすることを目的としているようである。所収の論文は、第一章では、道生の法華経疏に依つて、その特色を考察し、特に機に思想は道生に於て最も早く見られること、後世の法雲の「三三四一の説」及び「踰闕理教之間」等の思想の萌芽が見られることに注意し、第二章では、法華義記を概説し、永遠觀に法雲の関心があつたとしている。

第三章は、天台三大部の概略と、特に法華玄義・文句の概説を行い、第四章では、法華玄論の内容紹介と、吉藏の諸大乘經典に對する態度について述べ、第五章は、法華義疏に於て、吉藏の四車説論難に用いた教証を照合してその当否を考察している。第六章は、律宗と法華経という従来注意されなかった關係を考察しているが、結論に於て密接な關係の認められないこと、第七章は、法華玄賛に依つての窺基の解釈と法華論の解釈との比較をしている。第八章は湛然の天台教学の特色を探らんとして、五百問論の概説を行い、第九章では、宋代の禪僧戒環の法華経要解の特異点を指摘し、第十章では、智旭の思想の特色と、法華経会義の概説をし、法華文句・文句記との比較を行っている。

これらの論文は標題を見ても窺われるように、ほとんど皆、各釈家の著述を一つ一つとりあげて、著者の伝記や、註釈書の科文、成立年代等を概観し、内容の概要を紹介するといった、いわゆる「佛書解題」的な様相であって、思想上の本質的課題の追究に至らなかつたものも見うけられるようである。論文の内容も、従来の説の略述である傾向が強く、中には著者が、この法華經研究シリーズの中で既に発表されたものを、材料とする著述をかえたただけで、論点に於て結局は殆んど新見解の見られないようなものもあるように思う。

本書では、註釈家の総合的研究を討究し、その思想史の変遷を明らかにしたいという目的があつたが、本篇の所収論文を見ると、一様に各著者が、中国の代表的な釈家のそれぞれ単一の著述を分担して、個人単位に研究するという形式がとられている。これは編集の方針がそうであつたためと思われるが、各釈家の法華思想を明らかにすることからも、唯一つの註疏によつてのみ概観するのでは十分といえないであろう。各釈家の思想の中で、法華經の註疏にしても変遷があらうし、その人の思想全体の中の法華經の位置づけが必要であらう。ただ単に法華經の註釈書があるからその中に述べられている思想を概説するというならば、註疏のない釈家には法華經の思想が与えた影響は認められないということになるが、それでよいものかどうか疑問を残すことになる。

又、各註釈書を総合的に討究するということについても、その方法には問題がありそうである。各註疏中に引かれている他

説への批判の紹介はあるが、思想史の流れの中で、広い視野から個々の註疏を見、有機的に関係づける追究が十分ではなかつたように思われる。

法華經が中国佛教の中で、智識人の中と庶民層の中とに於て次第に重視されていく事情と、及び各時代に釈家に於ける法華經の思想の関心の点の変遷などの考察が望まれる。

これらの点は、本書に於ける論文の考察が単一の註釈書の概説に終始するきらいがあつて、法華經研究が、中国での他の諸大乘經・諸大乘論の研究と如何に関係しあつたかについて全く触れられていない点に原因がある。

第三篇は「漢訳文献による法華經及びインド撰述註釈書の研究」として八篇の論文を収め、漢訳された法華經の訳語の問題を中心に行っている。所収論文は次の通りである。

○法華經の漢訳における諸問題

1 法華經における法護と羅什の訳語（金倉圓照）

2 竺法護の訳經について（佐々木孝憲）

○法華經の音義の研究

3 葉草品後分の羅什不訳に就いて（松濤誠康）

4 一切經音義中の法華音義について（兜木正亨）

○法華經の訳語の研究

5 教団史より見た正法華經の特徴（望月良晃）

6 法華經興期の担い手（久保継成）

7 大智度論と法華經（塚本啓祥）

8 法華論における授記の研究（田賀龍彦）

この篇では、漢訳された法華經の訳語に関して、法護訳の正法華經と羅什訳の妙法蓮華經の相違を明らかにすることが主要内容をなしており、インド撰述註釈書の研究と云っても全体としてまとまったものとなっていない。

1は、法護と羅什の訳語のちがいを梵文と比較し、2は、法護の訳出經典と訳語の特色、3は、藥草品後分が何故羅什訳にはないのかについて、4は、玄應・慧琳・可洪の音義中の法華音義の比較、5は、正法華經の訳語を通して、法供養、塔觀、誹謗者、教団について考察しようとしており、6は、菩薩、比丘、善男子などの呼称について、羅什訳とサンスクリットを比較している。7は、智度論に引用されている法華經と、漢訳の正法華、妙法華の關係について三者を比較して検討し、更に智度論の著者について各説を紹介し、特にラモット教授の説に注意している。8は、女人成佛について阿含經典に見られる思想を概観しているが、論題の法華論に於ける授記の考察はわずかに触れられているだけである。

この第三篇も各論文が内容に於て相互に緊密な連繫を欠き、且つ標題に沿わない論究も見られる。ここでは訳語についての論文が多いが、唯比較して相違点を指摘しているに止まるようである。又法華經の訳經史上の問題を総合的に検討しているわけでもなく、全体としてのまとまりがない。法護訳の正法華經は羅什の妙法蓮華經訳出以後全く講讀されなくなつたが、それは如何なる理由によるのかとの考察がなされていないのはどうしたことであろうか。両者の比較を行うより、この問題につい

ても検討が加えられることによって、法華經の中國受容の特色を探る一つの鍵が得られたのではないかと思う。

次にインド撰述註釈書の研究というが、所収の二論文だけで十分その意を果すとはいえない。この問題については、既刊の法華經研究Ⅰ・Ⅲにも關係の論文が見られるが、インド思想上の法華經の展開をまとめて検討し、更に中國での研究とのちがいについての特色を明らかにする必要がある。尚この篇は本書の中國的展開という主題からはいささかはずれた問題のようである。

第四篇は「チベット訳法華經文獻の研究」であり、次の二篇を収めている。

1 チベット語訳法華經の二三の問題（壬生台舜）

2 西藏訳正法蓮華註と法華玄贊に見られる三草二木喩（中村瑞隆）

この篇では、チベット訳正法白蓮華經についての検討と、蓮華註についての考察であり、チベットに於ける法華經研究を明かそうとしているが、これも本書の中國的展開の本論と關係があるろうか。これについても法華經研究Ⅰ・Ⅲに同じチベット佛教での考察があり、一つにまとめるべきであった。

この第三・四篇は特に本書に於てとりあげられるべき性格のものとは思えず、既刊の法華經研究の中の伝訳に関する項及びチベット佛教に関する項に於て論ぜられるべきであった。

以上、本書の研究目的と所収論文の内容を検討してきたが、最後に、法華経の総合研究に関して二三感想を述べたい。

第一に、本書は総合研究であるから、計画的に研究分野を分担し、全体としての体系が当然予想される論文集であるはずである。従って本書の研究目的は先にも紹介した如く、「法華経の註釈書を総合的に討究して、その思想的変遷を明らかにすることが得られるはずであった。しかし、結果的には、総合的な検討は全く見られなかった。このことは第二篇の項に於ても述べたが、総じて思想史として全体の流れの中での研究が殆んどなされていないという点に因由している。法華経の思想の考察は唯単に一つの註疏の概略だけでは説明しえない。これは他の経論研究との関係、各時代の思想界の状況背景の中に位置づけて考えるべきであろう。

第二には、本書が法華経の中国的展開ということに主眼があるならば、何故に中国的なのかという点が明らかにされねばならない。漢訳されたこと自体、或は中国での註釈書の作製が直ちに中国的受容であるとされているけれども、単にそれだけを以て中国的受容と云つてよいものかどうか。それらに共通して見られる独自性を探ることなくして、中国の特性を明らかにすることはできないであろう。

第三に、本書では註釈書のあるものについての考察であるが、法華経に関する直接の註釈書がないことが、直ちに法華

思想と無関係であるといえるであろうか。華嚴の元曉や法蔵や、地論の淨影慧遠などは法華に関する著述こそ残っていないくても、その学問体系中に法華の占める重みは決して無視できないと思われる。更には、中国での浄土教や禅、三階教などに関係するところがなかったといえるだろうか。そうした疑問についても本書に我々は期待していた。

第四は、本書の研究目的で「法華思想と中国文化との連関を把握する」とあるが、本書が中国的展開といながら、中国思想との関係が論究されていないのはどういうことであろうか。中国の文化・文学との関係については、既刊の法華経研究の中に關係論文が見られるが、それらは本書に於てこそ総合的に論究されるべきであった。更に法華経が中国の庶民層、又は居士の間に浸透したのは何故かということの究明も残された課題である。

第五は、法華経の総合研究が単に各研究者の興味による論述でなく、総合的な意味として、内容的に、法華経の一乘思想、方便思想、佛身觀、授記思想、現世利益などの論点について、各家に於て如何なる変遷があったかを検討する、いわばテーマよつての相互關係の総合研究も必要であろう。

第六は、本書の研究目的であった「法華思想と日本文化との連関究の基礎を明らかにすることについては、両者の接触についての吟味がここでは全く触れられていない。既刊の本シリーズ中に譲ったというのであろうか。

以上、本書の研究目的と所収論文の現実の内容についての不

一致を見てきたが、本書では概して先人の論文を参照するなり、批判するなりの傾向が少ない。従って本書には参考文献もあげられておらず、研究者にとって今一步の工夫が望ましいものであった。

これら様々の問題を本書は含んでおり、総合研究として編集上の配慮に希望することはあるけれども、何と云っても日本

の関係学者を動員した成果であり、これによって中国での代表的な法華経註釈書についての概要を知ることができる。後学者としては、これらの諸研究の恩恵に浴しながら、更に発想の転換を伴った再吟味が今日的な問題として課せられていることを思う。

若輩の妄評に御寛恕を乞うものである。

(昭和四十七年三月、京都平楽寺書店、A五版、六、〇〇〇円)